

也、荷精分布、懷陰引度也、轉爲凡水名、後漢書酈炎傳、韓信釣河曲注、河者水之總名也、故云又用河字也、廣本標目作河、正文唯作川也、音何四字、蓋誤也、刻版本同、下有爾雅曰衆流注海曰河、昌緣反、和名加波十六字、後人依別本所增、非那波氏之舊、其曰川作曰河者誤、

〔和漢三才圖會水五十七〕川音穿、河音何、和名加波、珍音軫、累石致川之廉者也、

釋名、川穿也、穿地而流也、周禮、匠人爲溝洫、粗廣五寸、其二相爲耦、一耦之伐廣尺深尺、謂之畎、倍畎謂之遂、倍遂曰溝、倍溝曰洫、倍洫曰畎、音澗、音澗之水會爲畎也、

〔段注說文解字十一下〕毋、穿通流水也、毋各本水作貫、毋穿物持之也、穿通也、則毋穿通流、又大於爲谷是也、有絕大乃謂川者、如爾雅水注川曰谿、許云出通川工記澑達於川是也、本小水之名、因以爲大水之名、虞書曰皋陶謨澑々距距、尚書作畎澑、今正今改也、後人所言深々々之水會爲川也、此擇尙書釋之、以見尙書之川與河字有間矣、川字有間矣、昌緣切古音在十三部讀如春雲漢之詩是也、凡川之屬皆从川

〔東雅二地輿〕河九八、義不詳、川の字讀む事また同じ川また讀てカレと云ひしは百濟の方言也、我國の語に川流をナガレといふ事も、彼國の方言に因れるなるべし、即今も朝鮮の方言に、川を川の名にナガラといふ所々に聞えて、長柄の字を用ゆる也、即是長川の義と見えたり、
〔倭訓栞前編六〕かは、河又川をよむは變るの義、逝水の晝夜にとまらず、淵瀬の移り變るをいふ也、人の鑿開きたるは渠也、又水字をよみし事、日本紀萬葉集に見えたり、

〔八雲御抄三上〕河

はやたつと云、玉水ともいふ、かはうちとは山の中なる川也、たとへば、川上の流出ははじめ也、せき川、菊平
にあふさか、あさ、ゆふ、よ川、鶴飼、山谷瀧、此はやみそぎをたまうの花さ
夏そま冬ゆく万せき在源氏、鶴川、いそともよめり、方にさざれ浪よきてながる